はじめに

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上田, 望 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28170

はじめに

2006年、金沢大学文学部教員の有志を中心に日中無形文化遺産研究会が発足した。この研究会の取り組みの一つに、中国江蘇省の伝統芸能の現地調査と芸能テキスト・映像のデータベース化という研究課題があった。金沢大学は中国の蘇州大学と早くから全学レベルの協定を結び教育・研究面で交流があったこともあり、上田望、黒田譜美らの研究グループは、蘇州を発祥地とする講唱芸能の一つ、「評弾」(評話と弾詞)を重点研究の対象にすることとし、この年、呉語や呉語の民間文学がご専門の石汝傑熊本学園大学教授(元蘇州大学教授)を研究会へ招聘し研究に着手した。

2007年には石教授の仲立ちで蘇州大学文学院と共同研究の協定を結び、蘇州大学内に本学のリエゾンオフィスを設置し、以後、蘇州大学の汪平教授を中心に弾詞や宝巻など江南の講唱芸能の整理が進められることとなった。

その成果の一つとして今回、公刊の運びとなったのが蘇州大学図書館に所蔵される弾詞『珍珠塔』のテキストである。弾詞という芸能ジャンルについては、本プロジェクトで刊行した『講談と評弾』の拙文をご参照願いたいが、なぜ本作を最初に選んだのかということについて簡単に述べておきたい。

かつて幸田露伴が、「九松亭(『珍珠塔』の別名:上田注)といふものあり。まづは弾詞の巨擘なるべし」(澤田瑞穂「弾詞『珍珠塔』のこと」より)と断じたのを除けば、日本では殆ど無名に等しい『珍珠塔』であるが、若き主人公の方卿が苦難の旅を経て状元に及第し複数の妻を娶るというストーリーは、明末清初以来の才子佳人小説の文法を愚直なまでに忠実に駆使したものであり、また方卿の道行きには民話のモチーフがこれでもかというほど詰め込まれ、さらには中国独特の社会構造やモラルが隠し味となって、濃厚な中国のにおいを発散している佳篇である。本作は弾詞の諸作品の中でも成立が早く、その版本は確実に清朝道光年間にまで遡ることができる。版本の問題については本書に載録されている黒田の稿に詳しいが、一つの弾詞作品が二系統に分化しているという事実からも事ほど左様に版を重ねた人気作であったと言えよう。その物語は江南の諸文芸にも影響を与え、21世紀の今日でも多くの地方劇で『珍珠塔』の演目を目にすることができる。弾詞『珍珠塔』と他の芸能の『珍珠塔』物語を比較することで、江南地域における物語の変容と伝播の仕組みを解明し、さらに踏み込んでこの作品の何が中国の人々を惹きつけるのか、その物語世界と背後にあるものを明らかにすることができれば、中国の基層文化の理解の一助となる筈である。

なお、本書は紙幅の制約もあって校訂テキストと解説しか載せていないが、版本の全画像や電子ファイルについては、後日インターネット上での公開を期している。この弾詞『珍珠塔』を皮切りに2010年からは蘇州大学図書館の助勢も得て、同館に所蔵される弾詞や宝巻の整理・校勘と電子ファイル化を進めており、逐次公刊していく予定である。芸能データベースの構築と電子コーパスを活用した芸能研究は緒についたばかりであり、大方のご批正とご教示をお願い申し上げる。最後になったが、本書の刊行は蘇州大学の汪平教授の熱心なご

支援がなければなし得なかった。入力と校正については蘇州大学の林斉倩先生、車玉茜先生、曹暁燕先生、方嵐先生、蒋玉芝先生のご助力を煩わせた。また書影の掲載については古籍特藏部の趙明主任からご厚意を賜った。この場を借りてこれまでご協力いただいた全ての方々のご芳名を誌し、感謝の意を表する次第である。　（上田　望）